

平成14年度香小研国語部会研究テーマについて

香小研国語部会 研究部

1 これまでの研究の成果と課題

平成12年度，13年度の2年間，香小研国語部では「改訂学習指導要領の趣旨に沿った国語科学習」という移行期間ならではのテーマを設定し，研究を進めてきた。改訂学習指導要領の趣旨を，例えば，「伝え合う」ということばでとらえ，「伝え合う力を育てる国語科学習」等と置かなかった背景は次の通りである。この2年間は，これから求められる国語科学習の在り方について，私たち教師自身の大幅な意識改革を迫られている時期であった。改訂学習指導要領では，領域編成が変わり，具体的な言語活動例が示された。また，「相手意識」や「目的意識」といった言語意識を明確にもつことができるような場面と時間を学習指導の中に適切に位置付けることを重視し，目標や内容も2学年まとめて示された。これに伴って，教科書も，教材集の色合いが強かったものから，言語活動を核とした，ほぼ一月1単元の構成へと変わった。教師の多くは，どんな授業イメージを持って，何をどのように指導していったらよいのかにとまどっていたのである。この時期に，私たち香小研国語部が求めたものは，「改訂学習指導要領の趣旨は何か」「どのような授業イメージを持てばよいのか」「何をどのように指導すべきなのか」といったことについて，真正面から取り組むということであった。

平成12年度の夏季研修会においては，「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」といった領域編成で，1学期単元を特定し，具体的な指導場面での主張点をぶつけ合うパネル討議形式で協議した。指導者の吉永幸司先生にも，模擬授業形式で学習指導における具体的な指導の在り方を示唆していただいた。成果として，目的意識や相手意識を明確にもった言語活動を展開しながら，日常生活に生きる話す・聞く，書く，読むの基礎・基本となる内容を繰り返して学習し，確実に言語能力を育成することの有効性が確認された。また，各領域の基礎・基本となる力を見いだし，その系統性を探ろうとしたことには，広く会員の評価を得ることができた。それと同時に，基礎・基本となる力とは何なのか，その系統性をどう把握し，どのように指導すべきなのかといった課題も明確になった。

平成13年度の夏季研修会では，前年度の課題を受け，3つの領域編成で協議することは踏襲しながらも，それぞれの領域や学年，単元で身に付けさせたい基礎・基本の力とは何なのか，そして，それをどのように指導するのが有効なのかについて，各郡市が主張し，討論するといった形で協議した。成果として，指導要領に示されている文言から一歩進み，各学年の各単元レベルで具体的に基礎・基本となる力をとらえ，言語活動の特性とからませて，どのように指導すべきかといったことに着目することの重要性が確認された。また，そのとらえについて，実践レベルでの討論も多く見られた。課題としては，このことをさらに追究していき，各領域での基礎・基本の力を視点をもって具体化していくことの重要性や，これらの基礎・基本の力を，子どもたちの実なる生活に照らして考えていかなければならないことが浮かび上がった。

2 平成14年度のテーマ

生きて働く言語の力を育む国語科学習

基礎・基本の力とその指導の在り方を求めて

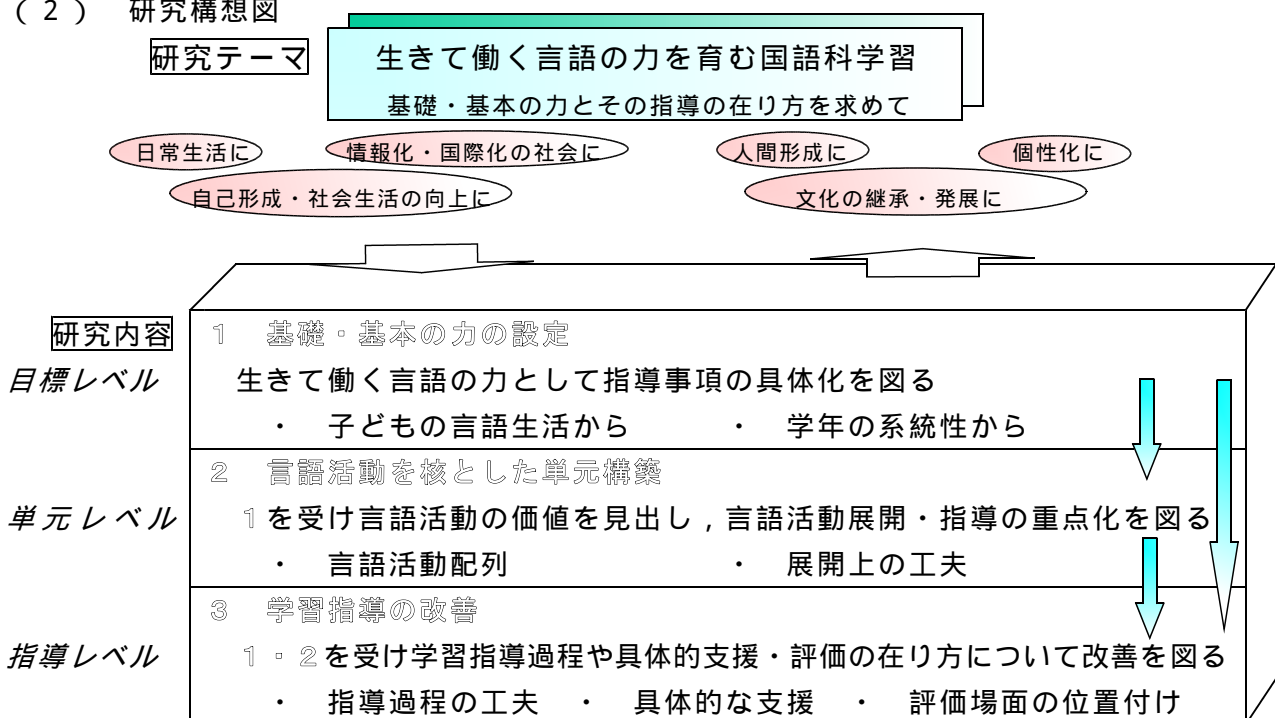
(1) 研究テーマについて

急速な情報化が進む時代において、もはや言語だけの情報の遣り取りを主とした「言語コミュニケーション」は少なくなってきた。私たちは、映像と言語を併せ持った情報を受信し、生産・発信しているのである。また、インターネット等のメディアの発達により、莫大な情報が瞬時に飛び込んでくる時代でもある。さらには、「国際社会に通用する表現者の育成」や「日本語を学習する外国人の急激な増加」等、進む国際化にも目を向けなければならない。このことは、子どもたちの実生活にも影響を及ぼしている。言語を一切用いずに買い物ができる時代であり、昔の子どもたちの言語生活とは違い、言語生活の重要な部分が、情報生活の中に吸収されてしまっている傾向である。

一方、言葉によって人々は思考し、判断し、想像を膨らませている。そして、個性や人格を形成していくのである。先述のことが「社会の変化に対応する」ということであれば、このことは、言語教育として「不易」なことである。

今、求められている「生きて働く言語の力」とは、この両面をとらえたものでなくてはならない。つまり、基礎・基本の力を、子どもの生活にどのように生きて働くのかといった視点から見直して設定し、その力を培うために、どのような指導をしていくべきかを見定めていかなければならないのである。そこで、香川県小学校教育研究会国語部会では、上記の平成14年度の研究テーマを設定したのである。

(2) 研究構想図



(3) 研究内容

研究内容については、目標レベルとしての「基礎・基本の力の設定」、その目標を受けての単元レベルとしての「言語活動を核とした単元構築」、そして、目標と単元構築を受けた1時間の学習指導レベルとしての「学習指導の改善」の3つにしていく。

香川県小学校教育研究会国語部会としては、研究内容として3つの横軸を設定した。これは、個々に独立した研究内容ではなく、一連の内容としてとらえていかなければならない。

また、各都市の取り組みについては、この研究内容を縦に通すものを設定していくことが大切である。例えば、領域を絞り込むことや、「目的に応じた言語の力を育む」「豊かな表現力を育成する」等の視点を設定するといったことである。県が横軸を設定し、各都市が縦軸を持つことによって、本研究テーマは、具体的な実践研究となっていくのである。

基礎・基本の力の設定

文部科学省から出されている「小学校学習指導要領」では、国語の力の育成はもちろんのこと、児童の発達段階や中学校との関連を重視し、重点的な指導ができるように2学年をまとめた形で指導事項が設定されている。系統的・段階的な指導や、螺旋的・反復的な指導ができるように配慮されている。

しかし、これは指導事項であり、この内容が達成されるために「どんな言語の力」が必要なのか、または、この内容を指導することによってどんな力が育成できるのかといった分析が必要である。

例えば、〔第5学年及び第6学年〕の内容Cの読むことには、次のような指導事項がある。

エ 書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にし
ながら読むこと

これを受けて「解説書」には、

・・・主観に偏らず文章構成や文末表現に着目するなど言葉を手がかりにして意見や感想をとらえる能力と態度を身に付けることが大切である。

と、述べられている。解説書にも、「言語の力」としての分析がなされているのである。また、言語事項として挙げられている「文や文章にはいろいろな構成があることについて理解する」ということを十分に考慮して目標の設定を行っていく必要がある。

このことを踏まえ、第5学年において、『森林のおくりもの』（説明的文章）を教材とした場合には、どのような「言語の力」の育成を目標に置けばよいのだろうか。

小学校高学年ともなると、情報の受信量もかなり増えてくる。情報が氾濫する社会の中では、情報の信憑性を読みとることができる力が重要となってくる。情報を鵜呑みにするのではなく、情報に惑わされることがない読み手の育成が必要となる。そのためには、筆者の主張をそのままに受け取るのではなく、「筆者は、～と言い切っているが、そう言い切ってもよいだけの根拠があるのか」という読み方をしていくことも大切である。つまり、「主張と、それを導いた根拠との整合に目を向けて読む力」である。この力を支えるものが、「文章構成・文末表現に

着目する力」であり，小学校中学年で学習している「中心となる語や文，段落相互の関係」について読む力を活用することである。このような「主張と，それを導いた根拠との整合に目を向けて読む力」は，様々な子どもの生活にも生きて働く言語の力となる。また，この力は，「話す・聞く」，「書く」といった他の領域にも共通して活用していくことができるものとなる。

言語活動を核とした単元構築

具体的な目標（言語の力）が設定されると，その目標達成のために，どのように指導していけばよいのかが問題となる。まずは，どのような単元を組んでいくかという「単元構築レベル」である。

単元を構築する際に大切にしたいことは，今回の学習指導要領で特に重視されている「子どもの相手意識・目的意識」である。そこで，指導要領には，各学年，各領域の指導事項をよりよく達成するための「言語活動例」が以下のような系統で示されている。

話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「スピーチ系統」 ・ 「聞くこと系統」 ・ 「話すこと系統」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「文字言語で伝え合うこと系統」(題材 手紙) ・ 「情報収集系統」 ・ 「他教科との関連・総合の系統」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「読書活動系統」 (学校図書館における指導との関連)

これを受けて教科書にも，言語活動を核としたほぼ一月1単元での構成がなされている。例えば，平成14年度版の東京書籍「新しい国語五下」の11月教材では，『森林のおくりもの』を主教材とし，「森林・環境問題ブックガイドづくり」といった言語活動を設定している。そして，以下の3つの段階が示されている。

■ 「森林のおくりもの」を読み返し，知りたいことをまとめる。

■ 調べてみたい問題についての資料を見つける。

■ ブックガイドを作って読み合う。

■では，「森林のおくりもの」を読み，説明の例について検証していく。子どもたちには，「書かれていないこと・書かれてはいるがさらに詳しく知りたいこと」といった観点で，文章検討をしていくことがねらいである。このことで，「主張と，それを導いた根拠との整合に目を向けて読む力」を培っていくことができる。

■では，学校図書館，読書指導との関連，インターネットの活用をしながら，読書によって情報を収集していく力を培っていく。高学年では，「必要な資料を選んで読む」という指導事項がある。ここでは，「結論（意見）の裏付けに必要な資料を選ぶ力」が培える。また，「その資料の必要な部分を自分のことばでまとめていく力」も培える。

■では，「ブックガイド」を互いに読み合うこと（相互評価）で，感想を書き加える。この観点としては，「知りたいことに対する答えが書かれているのか，その内容は適切なのかを判断する力」を培うことができる。

このように，言語活動の特性と，価値を分析し，これを中核とした単元を構築する。場合によっては，複数の言語活動を組み合わせることも考えていく必要がある。

学習指導の改善

目標が定まり、言語活動を中核とした単元が構築されると、1時間の授業となる。研究内容の1・2を受け、1時間の学習指導は、どう改善していくべきであろうか。

学習指導の改善の視点として、以下の3点を考えている。

ア 指導過程の工夫

学習指導過程自体を工夫する。

例えば、1時間の授業の中でねらう基礎・基本の力について、全体でその有効性や価値を吟味する場を設定する。読む活動において、「生きて働く」といった視点から、教材の読み（言語内容）をより正確に、そして豊かに読みとることと、そのための着眼点（言語形式）のよさを併せて吟味していくことによって、他の言語活動や子どもの実生活に生きる言語の力の定着が図られると考える。この際、ある観点を敢えて活用できるための、教材の準備や場の設定を行う等の配慮が必要となる。

また、子どもの評価活動を活性化するために、1時間の学びを子ども自身がどうとらえているのか、これからどんな方向に向かっていこうとしているのかといった「自己評価」を促す場面の設定も大切である。

さらに、単元によっては子どもの生活からの題材を教材としていく等も考えられる。このように、学習指導過程自体を、ある視点から改善していくのである。

イ 具体的な支援

具体的な教師の働きかけを工夫する。

例えば、子どもが、その子らしい見方や考え方が表出できるためには、どのような具体的支援が必要となるのか。また、子どもの反応を組織する方法としては、どのような支援が必要となるのか。さらに、子ども着眼点のよさを、他の言語活動や子どもの生活に積極的に活用していくことができるために、どのようにしてその着眼点を一般化し、共有可能な状態にをしていくのか等である。

言語活動の活性化ばかりに重点が当てられて「活動あって学びがない」学習にはならないためにも、1時間の学習指導における教師の具体的な働きかけが、大変重要になるのである。

ウ 評価場面の位置付け

自己評価を促す場面を設定する。自己評価は、今回の指導要領にも位置付けられている。自己の学びを客観的に価値付けるためには、どの観点から自己の学びを見つめるのかという判断基準を高くしていく必要があり、その基準が、1時間の学習の基礎・基本の力となる。

例えば、子ども同士の相互評価をどう組み入れるのか。評価する観点を何に置くのか。そのために、教師（ゲストティーチャーも含む）の観点を、どう子どもたちに落としていくのか等である。

この場合、国語科の役割から考えると、言語内容と言語形式を併せ持った観点を設定することが重要である。

(4) 研究方法

各郡市の取り組みと平成14年度の夏期研修会

各郡市は、それぞれのテーマ(研究の視点)をもって研究を進めていく。その際、県のテーマ及び研究内容を「研究の横軸」とし、各郡市の研究の視点を「縦軸」とする。つまり、何を重点化して研究していくのかは、各郡市に任されることになるが、どの郡市も、研究内容の1～3までを実践研究していくことになる。

平成14年度の夏期研修会においては、平成15年度の四国大会の開催を踏まえ、以下のよう
に、小豆郡の研究の視点を最大限に生かした実践交流や討議を展開したい。

平成14年度の夏期研修会の持ち方について(案)

- 1 開会行事(会長・来賓挨拶)
 - 2 研究テーマ発表(香小研国語部・小豆郡「思いや考えを豊かに伝え合う」)
 - 3 言語活動として領域を分けた討論
- (1) 『書くこと』・・・討論参加(小豆郡)] 各郡市1実践
(2) 『読むこと』・・・討論参加(高松市・丸亀市)] 1～2名
- * 提案の中心は小豆郡の研究の視点をもとにする。
 - * 指導時間の組み込みについては、指導者の関係で未定。

昼食

- (3) 『話すこと・聞くこと』・・・(坂出市)パネルディスカッションを中心に
- 4 講演・指導
- 5 閉会行事(副会長挨拶) 太字は当番郡市

- 『書くこと』協力郡市・・・・・・・・・・()
- 『読むこと』協力郡市・・・・・・・・・・()
- 『話すこと・聞くこと』協力郡市・・・・・・()

研究冊子

平成13年度の編集方針に準じる。